

これは「刈田」と呼ばれ、敵の食糧を絶つことと城の外に誘いだすための軍事行動であった。一時的に真田軍を外に追い出すことに成功した徳川軍だったが、これは刈田戦法を逆利用した巧妙な真田軍の罠であった。刈田戦法の間、上田城での攻防に徳川軍を引きつけていた真田軍は、秀忠がいる陣に奇襲をかけ徳川軍を圧倒する。上田城をなかなか攻略できないその時、関ヶ原に早く向かうよう家康からの使者が到達したのである。秀忠はすぐさま全軍を小諸まで撤退させた。第二次上田合戦は、真田軍の大勝で幕を閉じた。関ヶ原に急いで向かう秀忠であったが、木曾谷の険しい山道に時間を取られ、結局15日開戦した関ヶ原の戦い間に合わなかった。

東軍、家康は関ヶ原の戦いに勝利するが、遅れてきた秀忠を激怒。小諸城主である仙石秀久は、秀忠をかばい弁明と謝罪に務めたといわれ、秀忠が徳川幕府二代目になつてからも重要な役割を任せられた。

### 【上田合戦での真田の戦法】

結果的に、関ヶ原の戦いは、徳川軍の勝利で幕を閉じたわけだが、関ヶ原の戦いにおける第二次上田合戦はとても大きな出来事だったことに間違いない。

秀忠が率いる3万8千人の軍勢を関ヶ原に遅れさせることを目的に真田昌幸は秀忠を挑発し、上田城に目を向けさせた。挑発にまんまと乗せられた秀忠は、怒りをあらわに上田城に進撃するが、準備万端の真田に返り討ちに会う。信繁が砥石城をあっさり徳川軍に渡したのにも意図がある。真田家の長男である信幸との争いを避けるだけではなく、東軍内での立場が危うかった信幸の手柄を上げさせ秀忠の信用を高めること及び秀忠軍を少しでも分散させるねらいがあった。数々の真田家のねらいが秀忠勢を関ヶ原の戦いに遅れさせた。当時21歳という秀忠の若さにつけ入った昌幸の見事な策略だったといえる。

もし、秀忠勢が関ヶ原の戦いに間に合っていれば、徳川軍は圧倒的な力で支配していたかもしれない。



小諸城に陣を構えた徳川軍。  
徳川軍を指揮するのは、のちに徳川二代目となる徳川秀忠。  
当時21歳の秀忠は、3万8千人の兵士を従えていた。  
写真は、徳川秀忠が腰をかけたという「憩石」と「石碑」。



仙石 秀久

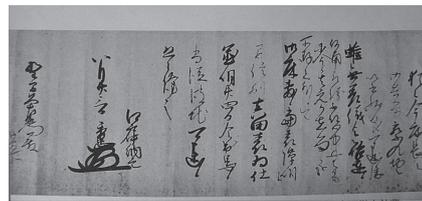
秀吉の家臣で小田原合戦の軍功により小諸城主として大名に復活。



榊原 康政

酒井忠次、本多忠勝、井伊直政と並ぶ徳川四天王の武将。

## 所蔵される史料の紹介



↑秀忠の書状

秀忠が真田氏を攻める旨を家康の先鋒として出陣した福島正則の家臣、野間久左衛門に宛てた書状（小諸市徴古館所蔵）。



←甲冑「赤防主」

家康の配下である福島正則とその精鋭部隊が着用したと伝わる。  
（小諸市教育委員会所蔵、徴古館展示）

下記参考文献を基にまとめました。  
文章表現等は、なるべく平易に記載するよう努めています。

◆参考・引用文献  
小諸市誌、「真田丸」支援プロジェクト作成のパンフレット  
ほか